0048026000

0048026-000

特２２５－１

被服

中等学校教科書株式会社・著

中等学校教科書

４

昭和２１

AHH

時225

被服

四

文部省檢定濟
昭和二十一年三月十一日
高等女學校家政科用

中等學校教科書株式會社

503—118

目錄

一 被服の手入れ・保存・更生（染色）……一
手入れ……一
保存……六
更生（染色）……九
二 婦人標準服……十四
三 男子服……二十五
開襟シャツ……二十五
（附）ジャンパーブラウス……二十八
ズボン……二十九
四 防寒用被服……三十五
丹前……三十五
〔増〕足袋……三十九
〔増〕手袋（編み物）……四十五
五 寢具類……五十
材料……五十
寸法……五十一
手入れ……五十二
〔増〕座蒲團……五十三

六　乳幼兒用被服……五十六
遊び着……五十六
【増】小裁ち長着……六十
【増】小裁ち袖なし羽織……六十二
【増】子守りばんてん……六十八
七、禮　服……七十三

一　被服の手入れ・保存・更生（染色）

手入れ

ご　補強と繕ひ

◇　被服の補強に就いて經驗した有效な方法を擧げなさい。

編み物の繕ひ

◇　胴着及び靴下は、どこが一番傷みますか。

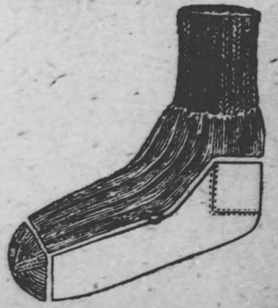
傷んだ場所と大きさによつて、いろ〳〵な工夫をします。例へば、一部分が薄くなつた場合は、細めの共絲で編み目に沿つて刺すか、或は別絲で刺繍のやうに刺し、同時に他の傷みやすい箇所をも刺して、全體に模樣を附けます。大きく穴のあいた物は、殘り絲で一部分編み足したり、傷みの多少や場所によつては、かくしを附けたり、布で補ふなどの方法も考へます。

なほ編む場合に、最初から傷みやすい場所を、取りはづしのできるやうに編んでおくと、繕ふのに便利です。

◇　虫害などによつて、小さい穴がたくさんあいた場合は、どのやうにしますか。

（イ）取りはづし、手編みの場合は、(1)圖のやうに傷みやすい所を別に編んで綴ぢ附けておき、その部分だけを取り換へます。薄地の既製品は傷んだ部分を切り取り、底の場合は、(2)圖のやうに、その形に合はせた厚地の毛織物などをはめ込んで綴ぢます。

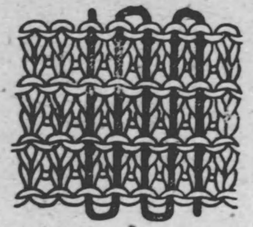
(イ)



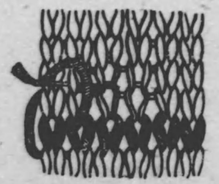
(ロ)

（ロ）補強

始めに補強しておく場合

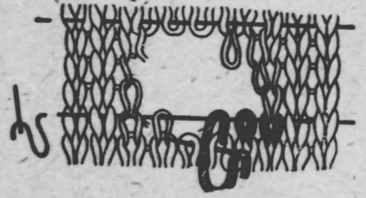


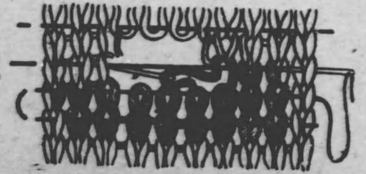
一部分が薄くなつた場合



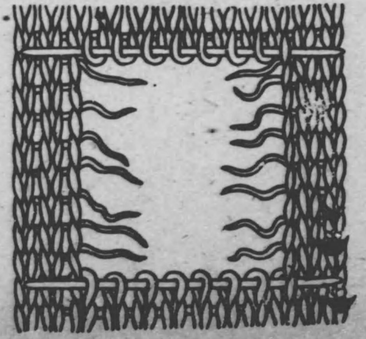
（ハ）穴あき

小穴の場合





穴が大きい場合は四角に解いて編み足し、解いた絲は裏で圖のやうに掛けて綴ぢます。



二 洗濯

◇ 次の表にそれ〴〵記入しなさい。

種類＼方法	洗ひ方	濯ぎ	干し方	仕上げ	備考
木綿					
人絹・スフ					
麻					
絹					
毛					

しみ抜き

被服の一部にしみを生じた場合には、できるだけ早く處理することが最も大切です。原因のわからないしみの場合は、水・石鹸液などのやうな比較的安全な物を用ひて試みます。しみを取ることに專念して、地質や色あひを傷めることのないやう、豫め注意しなければなりません。

しみの抜き方には、刷毛・小刀・竹べら・布片などを用ひて取る方法と、水・石鹸液などの液體によつて取る方法とがあります。

◇　はね・蠟などのしみはどのやうにして取りますか。

液體を用ひる場合は、しみの部分を摘まみ洗ひにしますが、品物によつては、白布を重ねた上に、しみの部分を擴げ、小刷毛、又は叩き棒などに液を附けて輕く叩き、しみの上にも布を載せて押さへながら吸ひ取らせます。

油性を伴なふしみは、石鹸液・洗濯ソーダなどを用ひますが、揮發性の溶劑を用ひれば一層有效です。又、酸類その他酸性の物が附着した場合は、水・洗濯ソーダを用ひて取ります。いづれも藥液を用ひた場合は、あとに液の殘らないやうに注意します。

例

汗　早いうちならば水だけで取れますから、品物に應じて摘まみ洗ひをするほか、濡れ手拭で表裏から押さへて取り、又、霧を吹いてぼかすなどします。

◇　アンモニヤは汗や果汁に對してどのやうに作用しますか。

青インキ　青色染料のほかに鐵分を含むので、蓚酸を用ひるのが有效です。殘りの色を消すために漂白することもあります。

血液　冷水で取ります。溫湯では蛋白質を凝固させます。

墨　先づ水又は石鹸液で部分洗ひをし、跡の殘つた所を糊の濃液などを用ひて揉み取ります。

漂白

漂白劑は種々あつて、それ〳〵特殊な性能をもつてをりますが、そのうち普通に使用されるのは晒し粉です。晒し粉は、木綿・麻・スフ・人絹などの植物性纖維の漂白に適します。

（イ）液の作り方　晒し粉は水千分に對し、五乃至八分の割合（水の量は漂白する物の目方の十乃至十五倍）で、摺鉢に入れ、略〻同量の水を加へてよく摺り、次に約十倍の水を加へて乳狀液とし、暫く靜かにおいて上澄み液を取ります。これに更に水を加へて所要の液量とします。

（ロ）容器　なるべく深めの木製又は瀨戸引きの器、或はかめなどを用ひます。金屬類は晒し粉によつて酸化、腐蝕され、又纖維に着色する虞があります。

（ハ）漂白の仕方　豫め洗濯した布地を、乾いてゐる物は水で濕してから、漂白液に一時間以內浸し、適度の白さに漂白された時に取り出して絞り、十分に水洗ひをします。この際、麻類は木綿よりも晒し粉に侵されやすいから、やゝ稀薄な溶液を用ひます。

◇　漂白液に浸した後、更に薄い酸に入れることがあります。これは何のためですか。又、どのやうな注意がいりますか。

◇　布地に晒し粉が殘つてゐると、どんな結果になりますか。

◇　人絹・スフ類の漂白に就いて注意することは何ですか。

◇　動物性纖維に晒し粉を用ひると、どうなりますか。

保存

被服の保存には、汚れ・濕氣・虫害などに對する注意が必要で、被服を汚れたまゝ保存すると、黴を生じ、地質を傷め、又色あひを損しますから、汚れは直ちに取り除いておきます。

又、虫害を受けた衣類は、その蝕害の程度によつては、使用に耐へないものとなりますから、虫害を受けやすい物の保存は殊に注意しなければなりません。

一　虫干し

しまつてある被服は、密閉した容器を用ひない限り、次第に濕氣を帶びて來るものですから、時々風を通して乾燥させると共に、虫害を防がなければなりません。これを虫干しといひ、その時期は空氣が乾燥してゐて、虫害の少い十一月から翌年四月までに行なふのがよろしい。しかし、梅雨期などでも、甚だしく濕氣を帶びた場合は、適當な晴天の日を選んで風を通し、乾かすことが大切です。

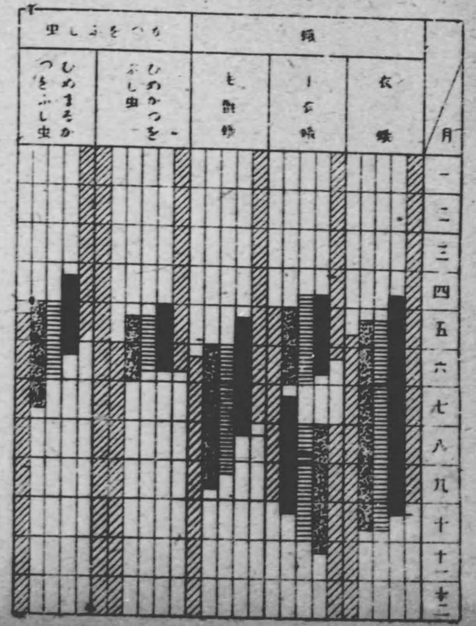
二　防虫

（一）害虫

被服の害虫は大別すると、蛾の類、かつをぶし虫の類、しみの三種になります。蛾とかつをぶし虫の類は昆虫で、一年に一乃至二回又は二年に一回發生し、幼虫の狀態で冬越しをし、毛製品を好んで蝕害します。しみは主に紙類や糊けのある被服を蝕害します。

衣蛾		二・五倍　二倍
		一年に一回發生 幼虫は筒狀の巢網を作つてその中に住み、時々半身を出して毛製品を蝕害します。成虫は好んで電燈などに近づきます。

小衣蛾		二倍　三倍
		一年に二回發生 衣蛾と同樣の習性をもつてゐます。成虫も衣蛾と同樣に燈火に集ります。
毛氈蛾		一・三倍　二倍
		一年に一回發生 幼虫は好んで毛氈・毛布のやうな硬い毛を蝕害します。成虫はあまり燈火に集りません。
ひめかつをぶし虫		三倍　三倍
		二年に一回發生 幼虫は毛製品・干し魚、繭の中のさなぎなどを蝕害します。成虫は、にんじん・アメリカばうふう・がまずみなどの花に集ります。
ひめまるかつをぶし虫		四倍　三・三倍
		一年に一回發生 幼虫は、毛製品・干し魚・かつをぶし、繭の中のさなぎなどを蝕害します。成虫は、ばらの花に集ります。
しみ		一・二倍
		銀白色に光つた、扁平な細長い虫で、暗い所を好みます。



◇　成虫の活動期はいつ頃でせう。その頃どんな注意がいりますか。

（二）　虫害の豫防

成虫には産卵の機會を與へないやうにし、又、その習性を利用して、集めて取ります。一方、屋内、殊に押入れ・戸棚などは清潔と乾燥に注意して、幼虫の集りやすい場所を作らないやうに注意します。又、被服を納めるには、密閉した容器に防虫劑を入れてしまふことが大切です。

（三）　防虫劑

防虫劑は適度の揮發性を有し、その氣體が容器の中に充滿して殺力を發生するものです。隨つて、揮發性が適度に速く、殺虫力も大きく、しかも纖維・染色に損傷を與へないものが最もよいわけです。現在防虫劑として有效なものに、パラジクロールベンゾールがあり、これを主成分とした種々の製品があります。これらを使用する場合は、防虫劑が直接被服に觸れないやうに紙などに包み、袋にはいつた物は、袋の一部を切つて、被服の間に入れておきます。その量はパラジクロールベンゾールならば、筒の引出し一箇分に約十グラム（二・七匁）が適當です。又、ナフタリンならば、これに比べて效力が劣りますから多めに入れ、なほ、容器の不完全な物ほど多く入れて、時々補充します。

三　容器としまひ方

被服の容器はいろ〳〵あつて、それ〴〵特徴がありますから、品物に應じて適當な容器を選びます。例へば、長期の保存用には、特に完全に密閉して虫害や濕氣を防ぐに適する物がよく、短期の保存用には被服の分類・整理及び出し入れに便利な物を用ひます。

被服は着用者・用途・品質などによつて適當に分類し、一定の場所にしまひます。よく清掃して適當に疊み、保存中に傷まないやうに、總べてに細かく注意して納めます。

◇　非常持出しの衣類はどのやうにしてありますか。

◇　押入れなど、空間を利用して被服の容器に代へることもできます。どんなにしたらよいでせう。

更　生（染色）

染色は、時局下特に堅牢に色揚げすることを主眼として更生して行くことが大切であります。

人造染料のうち、方法の容易なものに、直接染料・酸性染料があり、すが、このほか特に鮮麗に染めたい時は、塩基性染料を選び、最も堅牢

な染着を望む場合は、建染染料を用ひます。

しかし、人造染料は現今非常に原料が少く、又、染色用の糊などは食糧に振り向けられるものでありますから、これらに代る物を工夫することが望ましいことであります。

天然染料には、植物性染料・鑛物性染料・各種顔料などがあります。これらは材料が容易に得られる上に、染め方もやさしく、色も落ち着いてゐます。自然の中から材料を集めて工夫することはわが國では古くから行なはれてゐます。

◇　植物から取つた色素で染めた經驗がありますか。

一　人造染料による染色

（一）　染料の分量（染める物一〇〇グラム（約二七匁）に對し）。

（イ）　植物性繊維の染色

直接染料　一―八グラム（約〇・二七から二・一三匁）。

炭酸ソーダ　一―五グラム（約〇・二七から一・三二匁）。

食塩　三―一五グラム（約〇・八から四匁）。

（ロ）　動物性繊維の染色

酸性染料　〇・五―一八グラム（約〇・一四から四・八匁）。

醋酸　一―六グラム（約〇・二七から一・六匁）。

（二）　染料溶液の分量

染料溶液の分量は、品物の量、布の粗密及び織り方、染着の遲速及び濃淡などによつて加減しますが、大體品物がらくに浸る程度にします。

（三）　染料溶液の溫度

微溫湯から漸次溫度を高め、羊毛・木綿・麻は沸騰するまで熱し、スフ・人絹・絹などは、八、九十度で染めます。

（四）　染色時間

染料の染着具合、液の溫度、色の濃淡、品物の地質などによつて加減しますが、普通は二十分乃至一時間ぐらゐを要します。

（五）　染色の順序

品物は糊け・汚れを除き、乾いた物は一旦水に浸して水をきり、染料溶液へ擴げるやうにして浸し入れ、平均にかき混ぜ、必要に應じて染料や助劑を加へます。

交織物の染色は、先づ直接染料を用ひ、食塩を加へて植物性繊維を染め、次に醋酸を少量づつ加へて動物性繊維を染める方法と、始めに直接染料を用ひ、やゝ低溫で植物性繊維を染めて一旦水洗ひし、次に異色の酸性染料を用ひて、動物性繊維のみを染める方法とがあります。

いづれも十分染着したら引き上げ、直ちに擴げて、大體冷却してから色が出なくなるまで清水で濯ぎ、日かげで乾かします。

二　植物染料による染色

（一）　採集と保存

茶殻、たまねぎの皮、春の野のよもぎの葉、いたどり・ぎしぎしの根やくぬぎの實、栗・椎などの樹皮や葉など、身近な物を集めます。草や實は、十分成熟した物を晴天の日に採集します。これらをよく乾かして丈夫な紙袋や罐に入れて密封すれば、長く保存ができます。

（二）　染料溶液の作り方

一反に對し凡そ五百グラム（約百三十三匁）ぐらゐを水洗ひして刻み、土鍋か瀨戸引き鍋に、水約五千立方センチ（二升七合七勺）と共に入れ、約一時間ぐらゐ煮て、十分色素を浸出し、布ごしするか又は上澄み液を取ります。

（三）　各種媒染剤の溶液

（イ）あくは、灰二、三百グラム（約五十三から八十匁）を二千立センチ（一升一合）の水で浸出し、布ごしするか、又は上澄み液を取ります。

（ロ）石灰液は水千分に對し、石灰二十乃至三十分の割合で浸出し、上澄み液を取ります。

（ハ）明礬・膽礬・重クロム酸カリ・綠礬は、いづれも水千分に對して、十乃至二十分の水溶液を用ひます。

（ニ）鐵漿は食酢を二倍に薄め、鐵屑凡そ百グラム（約二十七匁）を入れ、二、三十分間煮沸し、そのまゝ一晝夜ぐらゐ放置し、布ごしして適宜に薄めて用ひます。

（四）　植物染料とその色あひ

色あひ	材料	媒染剤
橙	茜の根	あく・石灰・明礬
淡赤	ざくろの花	あく
黄	くちなしの實	あく
同	たまねぎの皮	あく
同	笹の葉	明礬
同	萩の葉又は枝	石灰
橙黄	きしぎしの根	あく
暗綠	笹の葉	膽礬
同	よもぎの葉	鐵漿又は綠礬
茶	栗・椎・樫・ならくぬぎの樹皮又は葉	あく
同	茶殻又は茶の葉	明礬
焦げ茶	すすき	膽礬
赤茶	いたどりの根	石灰
淡紫	黒豆の皮	明礬
同	赤紫蘇の葉	あく
鼠	栗・くぬぎ・椎・樫・ならの樹皮	膽礬
黒	柳の樹皮	鐵漿又は綠礬
同	茶殻又は茶の葉	鐵漿又は綠礬

（五）　染め方

容器はかなけの出ない物を用ひ、斑の出來ないやうに注意して、約三十分乃至一時間ぐらゐ熱して引き上げ、一旦乾かしてから、媒染剤の溶液に二、三十分間浸します。或は布を縦に張り擴げ、やゝ濃く煮つめた染料溶液を刷毛引きし、一旦乾かしてから媒染剤の溶液を刷毛引きし、約二十分間張り擴げて、十分發色させる方法もあります。

いづれも、十分染着したら、よく水濯ぎをします。

◇　このほかによく染着する方法を考へてごらんなさい。

◇　斑の出來ないやうにするにはどうしますか。

◇　濃度の薄い染料で濃く染めるにはどうしますか。

模様染には、絞り染・描き染・型染・轉寫染・蠟染などがありますが、その中で絞り染は、上古既に纐纈と呼んで行なはれ、その簡單な方法は家庭染色にも適します。

二 婦人標準服

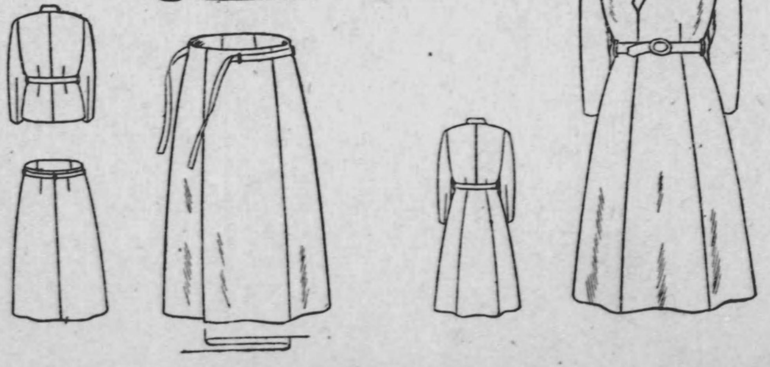
わが國婦人の服裝は、明治以後歐米の風を取り入れ、その種類も多くなりました。婦人標準服は、これらを現今の生活に適するやう、又、わが國の永い傳統のうちに育てられた和服の美點と、明治以後受け容れた洋服の機能性とを消化して作られました。これは標準形式を示したもので、應用の自由が認められてゐますが、つゝましい中にも活動的な、眞に日本の女子にふさはしい性格を現すことを根本としてゐる點で、婦人服の將來に對して、一つの解決を示してゐます。

私どもは、この根本理念を把握して、單なる思ひつきや摸倣に走ることなく、一層すぐれたものに育てて行くべきであります。

右に示す一部式一號と二部式二號のほかに、次のやうな形式があります。

一部式二號

二部式一號



これらは活動的で保健にもかなひ、しかも簡素な中にしとやかさをもつてゐます。衿が右前合はせである上に、衿元がゆるやかで、かぶらずに着られるのは、わが國民性から生まれた永い習慣を受け繼いだ親しみ深いものです。衿は又、汚れを防ぎ、保溫の役目もし、身ごろの斜めの伸びを抑へることにも役立つてゐます。

◇ 標準服の應用型を作る場合は、どんな點に注意しますか。

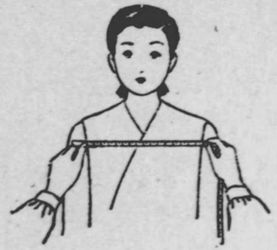
材料

退藏衣類を活用し、特に洗濯のきく物を用ひます。

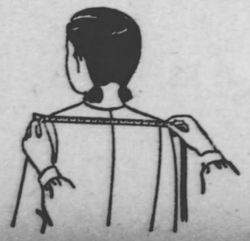
仕立て方

一 寸法

胸廻り
胴廻り
腰廻り
頸廻り
胸幅　左右の腕の附け根の間
着丈
背丈
腰丈　胴廻りと腰廻りの間
背幅
背肩幅　肩先まで
袖丈
手くび廻り



胸幅



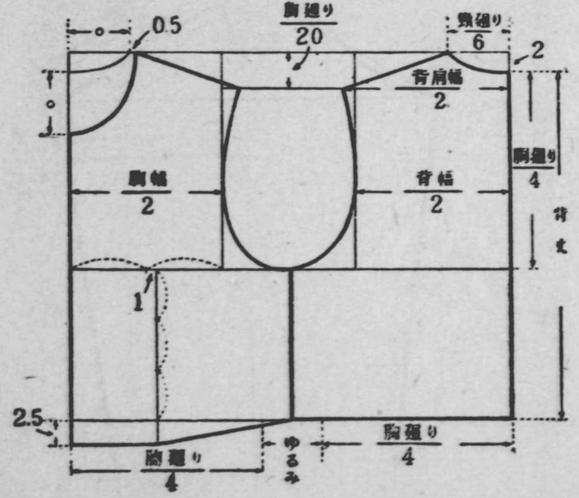
背肩幅

腰丈

◇ 各自の實測寸法から、學級の平均寸法を出し、自分のと比較してごらんなさい。

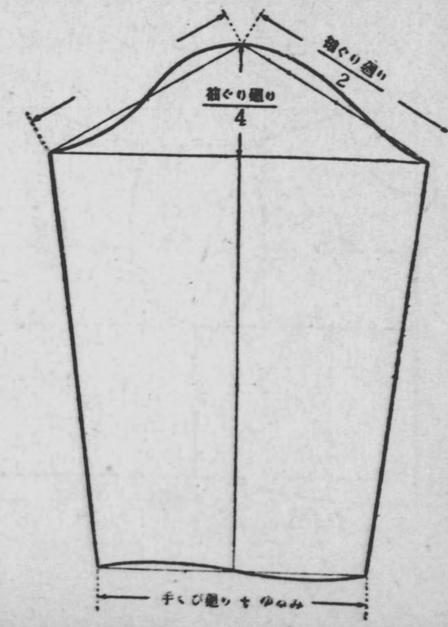
二 原型の取り方

（一） 胴



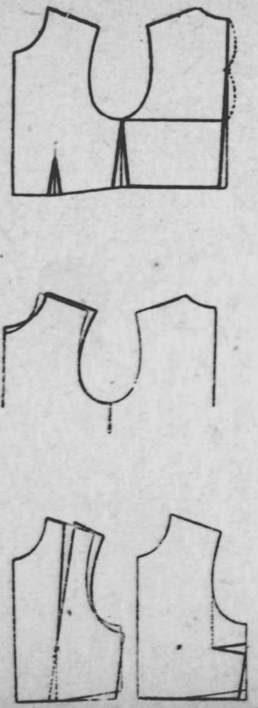
ゆるみは六センチ（一寸六分）ぐらゐ加へます。

（二）袖



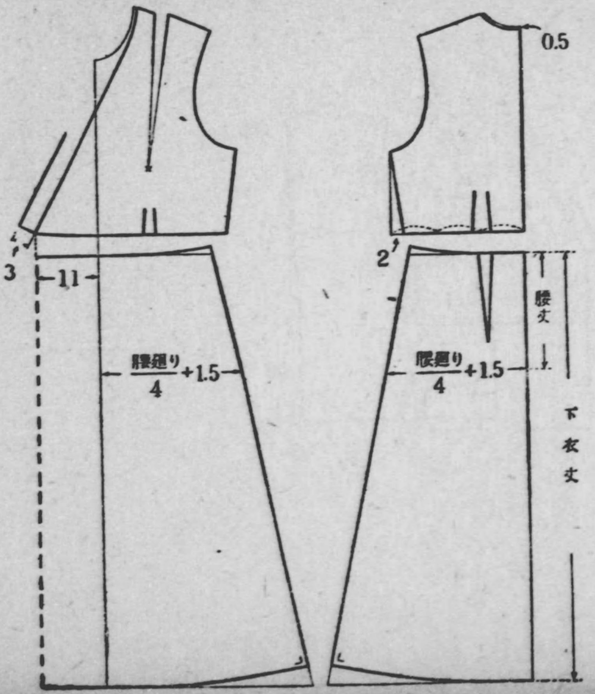
原型の取り方には、着る人の體型に合はせて作る方法と、始めに大體の割合を以つて作り、これを着る人の特徴に合はせて適宜に補正する方法とがあります。

次の圖の一つ〳〵に就いてよく考へ、着る人の體型に最もよく合ふやうに原型を檢討しなさい。

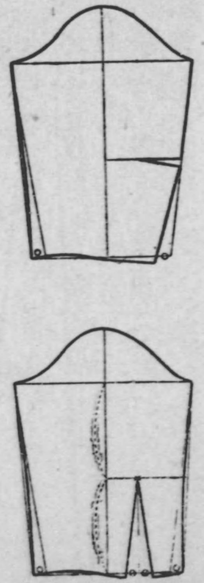


三　型紙の取り方

一部式一號



肘の位置は袖山線から七センチ（一寸八分）ぐらゐ。



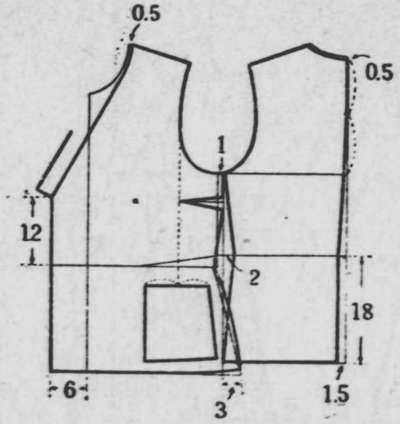
裾幅は三十三センチ（八寸七分）ぐらゐにします。

襞の深さは約二十センチ（五寸三分）にしますが、布の都合で十センチ（二寸六分）ぐらゐにしても差支ありません。

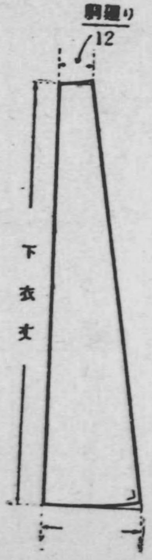
◇　衿ぐりを大きくしたのはなぜでせう。

二部式二號

上衣



下衣



裾廻りは百八十センチ（四尺七寸五分）ぐらゐにします。

以上二種の型紙の取り方から、仕立てようとする形の型紙を作りなさい。

四　裁ち方

型紙通りに標をし、豫め縫ひ方を考へ、縫ひ代を加へて裁ちます。

◇　一着分の總用布は、凡そどれくらゐでせう。

◇　着古した長着を利用する場合は、どんな注意がいりますか。

五　縫ひ方

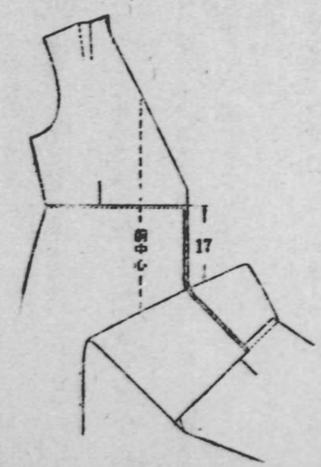
出來上りの形に假縫ひします。着用してみていけない所は、直して形を整へ、次の順序で本縫ひします。

一部式一號（單仕立て）

（イ）後身ごろ　背を縫ひ、胴はぎの所は、下衣は「くせ」を縫つて中央へ返し、上衣は適當に摘まんで上下を縫ひ合はせ、縫ひ代を下へ返します。

（ロ）前身ごろ　衿下のあきは、岡のやうに細く縁を取り、胴の縫合はせは、上は摘まみ、下は襞を開いて縫ひ、裏でまつります。

◇　かげ襞の少い時はどうしますか。



（ハ）肩の縫合はせ、前の「くせ」を縫つて中央へ返し、後肩を縮め加減にして袈縫ひにします。

（ニ）脇縫ひ　袈縫ひにして前へ返します。

◇　脇にかくしを附ける場合は、どのやうにしますか。

（ホ）衿附け　身ごろの斜めの端を、伸びないやうに細かく縫ひ、表から衿を附けて、裏でまつります。

（ヘ）裾の始末

（ト）袖及び袖附け　袖の「くせ」を縫ひ、袖下を袈縫ひにして前へ返し、袖口の始末をして、袖附けをします。

◇　袖山では、どんな注意がいりますか。

（チ）帯及び帯通し附け

（リ）ボタン及び掛け紐附け

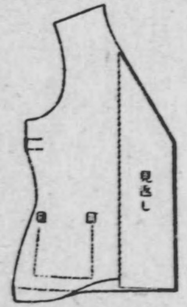
（ヌ）仕上げ

二部式二號（單仕立て）

上　衣

（イ）後身ごろ　背縫ひをして割ります。

（ロ）前身ごろ　かくしを附け、幅十センチ（二寸六分）ぐらゐの見返しを附けます。



（ハ）肩の縫合はせ　後肩を縮め加減にして袈縫ひにします。

（ニ）脇縫ひ　前の「くせ」を摘まんで袈縫ひにします。

（ホ）衿附け

（ヘ）裾の始末

（ト）袖及び袖附け

（チ）帯及び帯通し附け

（リ）ボタン及び掛け紐附け

下　衣

（イ）六枚はぎ及び脇あけの始末　左脇の上部二十センチ（五寸三分）ぐらゐを殘して他を縫ひ合はせます。脇あけは、前に見返しを、後に持出しを附け、あき止まりを留めます。

◇　見返し・持出しを別に附けない仕方を考へなさい。

（ロ）上部の始末　斜の布で出來上り二センチ（五分）ぐらゐの見返しを附けます。

（ハ）裾の始末

（ニ）帯及び帯通し附け

（ホ）ボタン及び掛け紐附け

一部式二號・二部式一號の縫ひ方は、以上二つの縫ひ方を應用します。

着用・手入れ

◇　錦仙の長着を更生した物は着用及び手入れに就いて、特にどんな點に注意しますか。

三男子服

開襟シャツ・ズボンは男子の仕事着として働きやすく便利なので、近頃これを用ひる人が多くなりました。夏は半袖・半ズボンにすれば、涼しくて布も経済ですが、容儀に注意することが必要であります。

形

材料

◇ シャツ及びズボンを作るのに、材料はどんな物を選びますか。

仕立て方

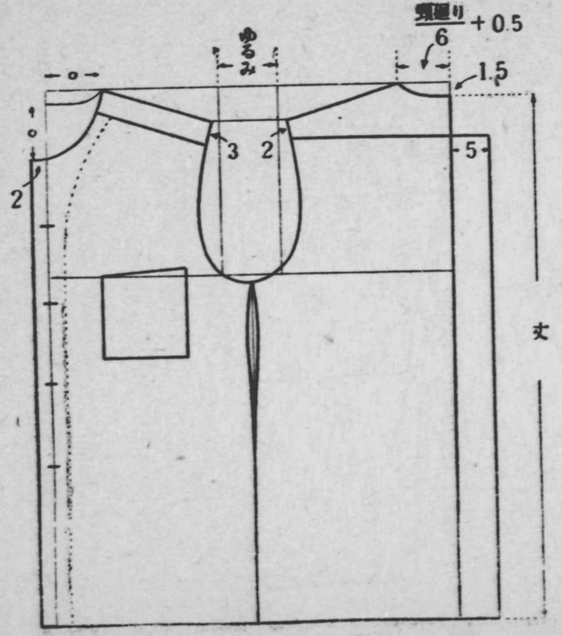
開襟シャツ

一　寸法

　胸廻り
　背丈
　ゆき
　頸廻り

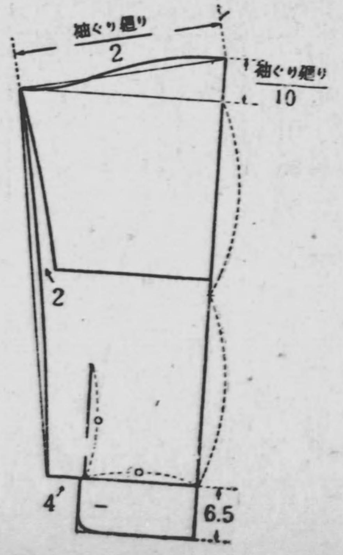
二　型紙の取り方

（一）身ごろ



丈　背丈に最少二十三センチ（六寸）ぐらゐ加へます。
保溫の上から後丈を長くしてもよろしい。
ゆるみ　八センチ（二寸）乃至十センチ（二寸六分）。
肩下り　四センチ（一寸）。
かくし　幅は十一センチ（二寸九分）ぐらゐ。

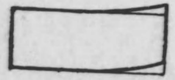
（二）袖



袖丈　ゆきから背肩幅を減じたものに洗ひ縮みの分を加へます。
袖口丈　十三センチ（三寸五分）ぐらゐにします。

（三）衿

衿幅は普通七・五センチ（二寸）ぐらゐにします。



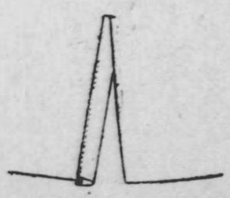
三　裁ち方

肩布は前後を肩で續け、表裏二枚取ります。

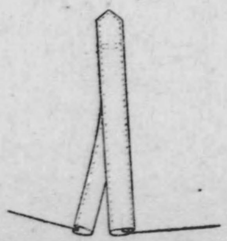
◇　肩布・衿布・袖口布にそれ〳〵布目の線を入れなさい。

四　縫ひ方

（イ）見返し附け及び始末　衿附け止まりまで縫ひ合はせ、切込みを入れて表に返します。

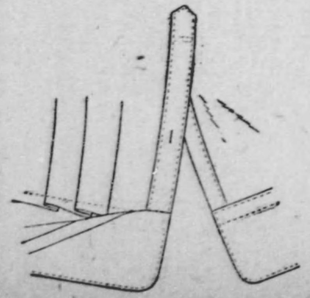


（ロ）肩布附け　後は肩布の下に襞を取り、肩布で挟み縫ひにし、前は表を縫ひ合はせて裏をまつり附けます。



（ハ）衿及び衿附け　心布を合はせて三方を縫ひ、心の縫ひ代を切り取つて返します。次に、衿を附けます。

（ニ）袖口あきの始末　内になる方へ、出來上り一・五センチ（四分）の持出しを附け、一方の持出しは裏側に縫ひ附け、表へかぶるやうに、二・五センチ（七分）の幅に折り上げ、圖のやうに縫ひます。



（ホ）袖附け　折りは身ごろへ返して折り伏せ縫ひにします。

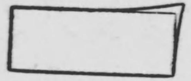
（ヘ）袖下及び脇縫ひ

（ト）袖口布の附け方　袖口布に心を入れて三方を縫つて返し、袖布は袖口布丈に合はせて襞を取り、圖のやうに縫ひます。

（チ）かくし附け

（リ）穴かゞり及びボタン附け　前あきの第一ボタンは衿ぐりから八センチ（二寸）ぐらゐに定め、九センチ（二寸四分）内外の間隔に横或は縦の穴かゞりをします。

［附］ジャンバーブラウス



身ごろ　開襟シャツと略ゞ同様にして、圖のやうにきめます。衿ぐりは衿を閉ぢた時、具合のよいやうにしらべます。

衿　開襟シャツの衿と同様でもよく、或は衿附け線を二センチ（五分）ぐらゐまで繰り下げてもよろしい。

ズボン

一、寸法の測り方

脇丈　腰骨の四センチ（一寸）上から足のくるぶしまで。

腰廻り

二、型紙の取り方

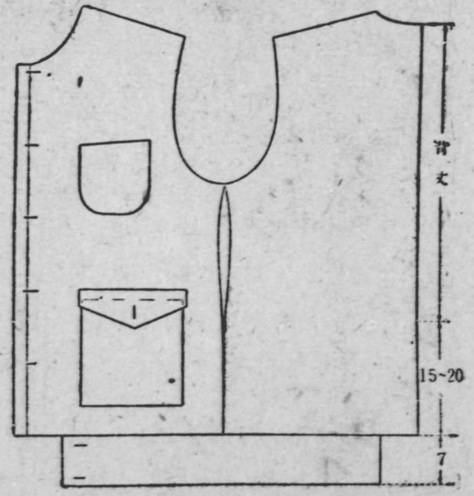
イロ間　腰廻りの四分の一に、ゆるみ二センチ（五分）を加へます。

跨上　腰廻りの四分の一に四センチ（一寸）を加へます。

折り山線　脇から腰廻りの六分の一。

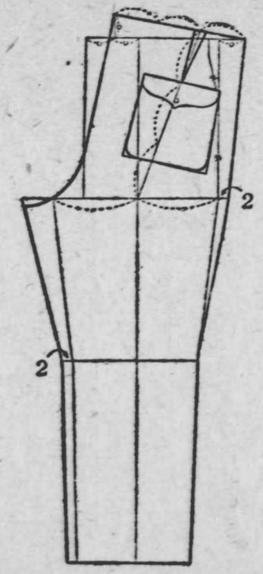
膝の所　跨下の二分の一より四センチ（一寸）上で折り山線を中心として腰廻りの四分の一。半ズボンは前後とも脇と跨上で二センチ（五分）づゝ廣くします。

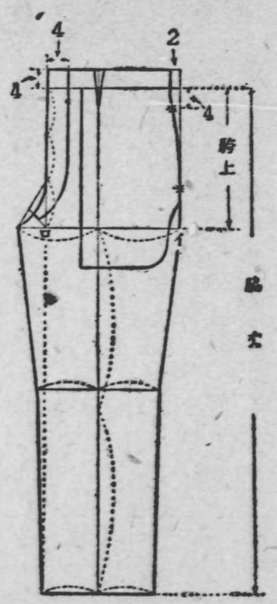
かくし口　十五センチ（四寸）。



後胯上　胴廻り線で圖のやうに倒します。

後かくし　幅十五センチ（四寸）を胴廻り線と平行にして取ります。





◇　半ズボンは、なぜ裾口を廣くするのでせう。

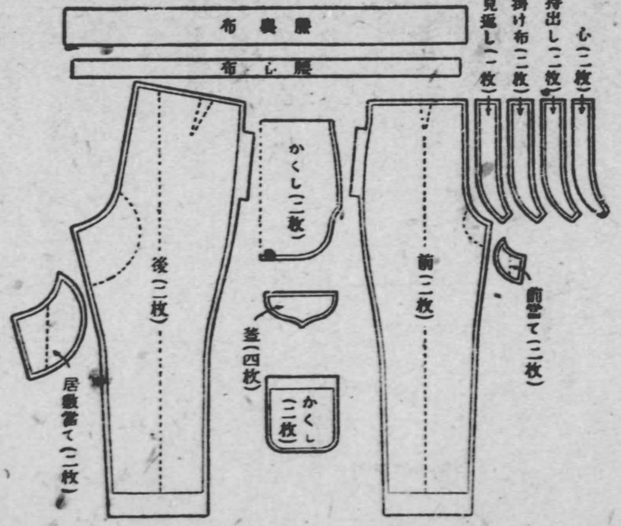
◇　居敷當て及び前當ては、どのくらゐの大きさが適當でせう。

三　裁ち方

型紙を並べてみて、布幅によつて總用布どれくらゐを必要とするかしらべなさい。

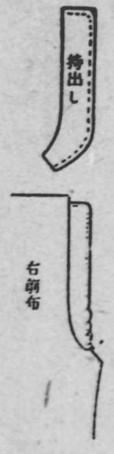
◇　丈や幅の足りない時には、どこでつぐのがよいでせう。

◇　片面の布で裁つ場合には、どんな點に注意しますか。



四　縫ひ方

（イ）　前あきの始末　持出し布は心布を入れて縫ひ、返して右前布に附け、縫ひ目を割つておきます。

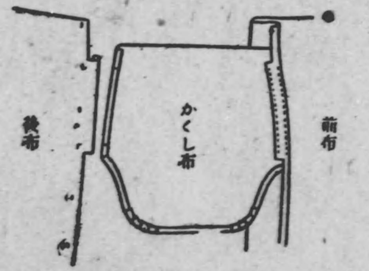


見返しは左前布に合はせ、あき止まりから見返し幅まで縫つて

返し、表から飾りミシンをかけます。

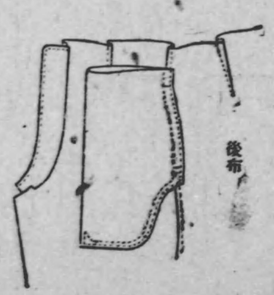
ボタン掛け布の裏は、三センチ（八分）短く、圖のやうに縫ひ穴かゞりをしてこれを左前布へ控へめに合はせてしつけをし、表から縫ひ附けます。

（ロ）脇かくし布附け　前布はかくし口を出來上りに折つて、かくし布を挟み込み、表の端を折つてしつけをし、表から幅一センチ（三分）ぐらゐに二本縫つて留めます。後布も同樣、かくし口の端を折り、かくし布の端を折つて、出來上りの所に合はせ、二本で縫ひ附けます。



（ハ）「くせ」及び脇縫ひ「くせ」を摘まみ、前後のかくし口をよく合はせて、折り伏せになるやうに縫ひ、かくし布の下は袋縫ひにします。

（ニ）後かくし附け　後布に力布を當ててかくしを附けます。蓋は裏を控へめにして縫ひ、穴かゞりをして圖のやうに縫ひ附け、返して表から布端の見えないやうにおさへ縫ひをします。



（ホ）胯上縫ひ　後胯上を縫ひ、折りは左身ごろへ返します。前あき下は二度縫ひにします。

◇　後胯上を縫ふ時、どのやうな注意がいりますか。

（イ）居敷當て及び前當て　居敷當ての中央は、かさばらないやうに縫ひ目を割つて、表の縫ひ目に綴ぢ附け、まはりを折つてまつり、前當ても同樣にまつり附けます。

（ト）腰裏布附け　表の上部は出來上りに折りをし、幅四センチ（一寸）の心布を入れ、しつけをしておきます。腰裏布の下部は細かく三つ折り縫ひにし、上部は表に合はせて適宜に摘まみを入れ、表の折り山から〇・三センチ（一分）はいつた所を縫つておきます。

次に、持出しに割りミシンをかけ、前立ての端をかゞります。腰裏布は端を前立てにまつり附け、上から四センチ（一寸）の所を表から縫ひ附けます。

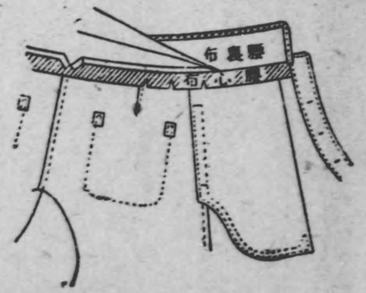
（チ）　脇下縫ひ　左右を續けて縫ひ、折りは前へ返します。

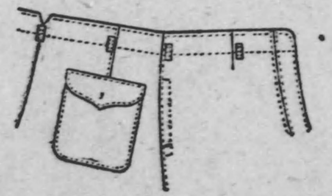
（リ）　裾の始末　幅四センチ（一寸）の三つ折り縫ひにします。

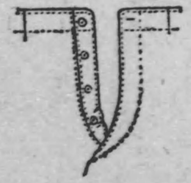
（ヌ）　帶通し附け　後は中心及びかくしの位置に、前は脇の縫ひ目の際及び折り山線の位置に附けます。

（ル）　穴かゞり及びボタン附け　左前立ての上部に穴かゞりをし、中央一箇所は絲留めをしておきます。ボタンはかくしに一箇づつ、前立てに四箇附けます。

（ヲ）　仕上げ　前の折り山線を正しく折つて仕上げます。







四　防寒用被服

防寒用の被服は寒い外氣などのために、急に體温を奪はれないやうにするのが要件であります。しかし、皮膚の自然のはたらきを妨げないやうにしなければなりません。

從來の綿入れ長着や丹前などは、ゆつたりと寛ぐには申し分がないのですが、活動には適しません。今日は屋内でも屋外でも、寒氣を冒して活動しなければならないのですから、被服にもその用意がなければなりません。それには、材料・形・着方など綜合的に生活の要件に適するやう工夫すべきであります。例へば、形は衿・袖口・裾などの開口をできるだけ小さくしたものが保温に適します。又、適度の空氣層を作ると、その保温效果は材料の不備を補ふことができますから、被服の重ね方やゆとりに就いて工夫することは、防寒上最も大切なわけであります。

なほ、被服の汚れは熱を傳へやすく、體温を奪ひますから、その清潔は、保温上からも大切なことであります。

これらの點を考慮して、材料を活用し、仕立て方を工夫すれば、厚地のものでなくても、十分に保温效果を擧げることができます。例へば、綿や眞綿の代りに古い布を重ねて用ひたり、紙を利用するなどは、わが國で古くから行なはれてゐる防寒上の工夫であります。

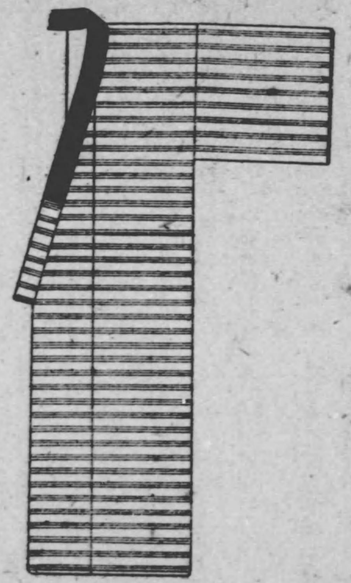
◇　袷一枚を着用した時よりも、單一枚を重ねた方が温かいのは、なぜでせう。

◇　タオル・毛織物などが保温性に富んでゐるのは、なぜでせうか。

丹前

丹前は、主に防寒用家庭着として廣く用ひられます。綿を厚く入れ、普通黒無地などの袖口と掛衿を附けますが、共衿を掛けることもあります。

形



材料

長着・羽織類から更生します。

綿はどてら綿約二百グラム（五十匁）三枚。

仕立て方

一　寸法

袖口ふき　〇・七センチ（二分）ぐらゐ。

裾ふき　一―一・五センチ（三分から四分）ぐらゐ。

後幅・前幅　各〻長着より〇・五センチ（一分）廣く。

他は長着に準じます。

二　裁ち方

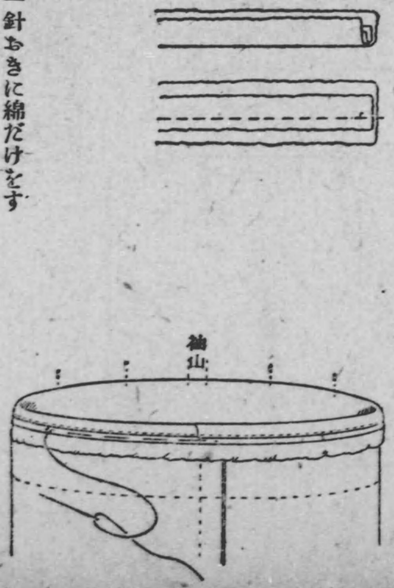
三　標附け

袖口及び袖附けは袖丈一ぱいに、その他は表・裏とも衿長着に準じます。

四　縫ひ方

裏袖の幅が狭い場合は足し布をして袖口布を附けます。その他は表・裏とも別々に縫つて裾を合はせ、表・裏の釣合をしらべます。

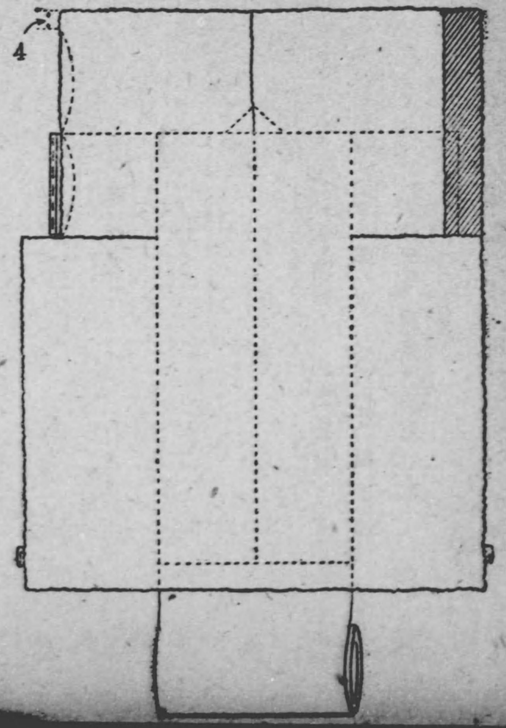
（イ）　含め綿　圖のやうに幅四センチ（一寸）と二センチ（五分）ぐらゐの綿を重ねてふき綿を作り、裏袖に含めて絲のつれないやうに綴ぢます。綴ぢ目は一針おきに綿だけをすくひます。

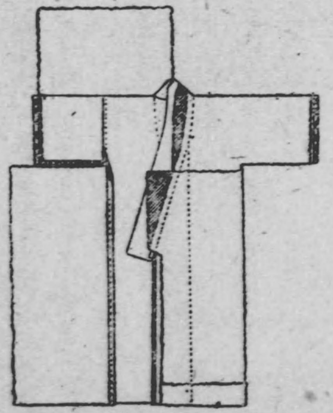


◇　一針おきに綿だけをすくふのはなぜでせうか。」

（ロ）　綿の入れ方　布の表を中にして疊み、後身ごろを上にして表側の方に綿を擴げます。綿はゆつたり入れ、裾には袖口と同じやうにふき綿を作つて入れます。裏綿をひく場合は、よく伸してつれないやうにします。

次に裾の方から、綿にしわが出來ないやうに注意して裏を擴げ前身ごろも同樣に綿を入れ、表の側をかぶせて引き合はせます。





（ハ）**袖綴ぢ**　袖はふきを出し、表・裏の釣合を見てしつけをかけ、裾ふきには綿をよく含ませて假綴ぢをしておきます。

（ニ）**つま先及び衿下くけ**　つま先から六センチ（一寸六分）ぐらゐを縫つて綿を含め、形を整へて假綴ぢをします。衿下は裏の方へ綿を含め、衿先から下へ三針ぐらゐ綴ぢて、表裏合はせてしつけをかけ、きせだけ奥をくけ合はせます。

（ホ）**衿の始末**　表裏の背・衿肩あき・剣先を合はせて待針を打ち、縫ひ目の所を二センチ（五分）ぐらゐの針目で綴ぢ合はせ、次にみつ衿心を入れ、衿先を縫ひ、綿の厚さを加減して、衿全體が平になるやうに整へて衿くけをします。

（ヘ）**袖口くけ**　表裏の釣合を見て、きせの分だけ奥をくけ合はせます。

（ト）**縦綴ぢ及び裾綴ぢ**　縦綴ぢは縫ひ目を合はせて待針を打ち、外へ絲が出ないやう、又、絲がつれないやうに注意して裾から身丈の半分ぐらゐ綴ぢ合はせ、裾綴ぢは袷長着に準じます。

〔增〕足袋

足袋は防寒に用ひるほか、禮裝・作業などにも必要です。主に既製品を使用して來ましたが、あり合はせの材料を用ひて、家庭で丈夫な物を作るやうにしたいものです。

形

材料

儀式用には白を用ひ、その他は色・柄などは適宜ですが、一般に丈夫な物を選びます。底は特に丈夫にします。

仕立て方

一　寸法の測り方

足を紙の上に置いて底の形を寫します。

次に各部の寸法を實測し、豫めその位置を底型に記しておきます。

イ　足くび廻り。

ロ　踵の高さ。

ハ　土踏まずの所の廻り。

ニ　足幅の最も廣い所の廻り。

ホ　おや指の最も太い所の廻り。

ヘ　四本指の方を、ニの位置を通ってその廻りを測ります。

ト　甲の上部で測ります。

二　原型の取り方

底型を基として、内甲・外甲の型をきめます。

(イ)　底のまはりと中央に線を引きます。

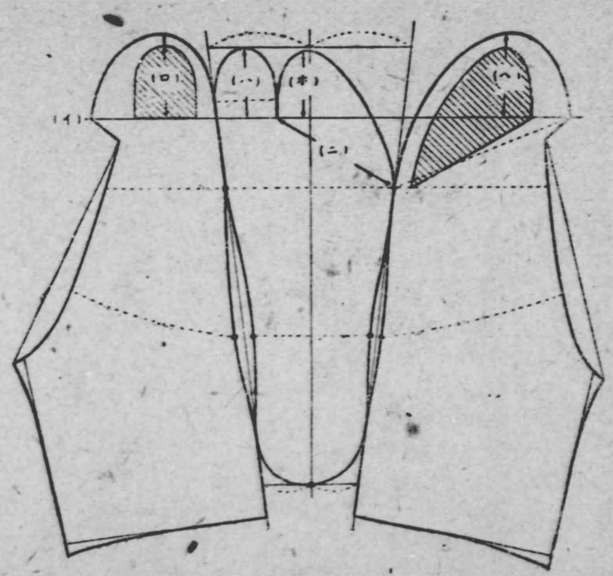
(ロ)　(イ)線は中央線に對して直角。

(ハ)　おや指廻りの寸法を指跨から(イ)線を通つて、甲の方へ標します。

(ニ)　(ロ)は(ハ)に〇・八センチ（二分）を加へます。

(ホ)　四本指の方の實測寸法から(ニ)を減じ、殘りの寸法を(イ)線へ結びます。

(ヘ)　(ハ)は(ホ)に〇・八センチ（二分）を加へます。



(ト)　指跨の厚みは一・五センチ（四分）ぐらゐを、(イ)線から一センチ（三分）下げて斜めに引きます。

(チ)　甲の方の底の丈は、(イ)線から底の踵までの輪郭線と踵中央までの斜線の寸法に同じ。

(リ)　踵の線は內甲の方を直角に引いて高さをきめ、上部は中央から自然に〇・五センチ（一分）出します。

(ヌ)　足くびの線は、足くび廻りの二分の一を、踵の高さより一センチ（三分）高く假線を引き、更に自然に〇・五センチ（一分）上げます。

（ル）甲上部の線を假に斜めに引きます。

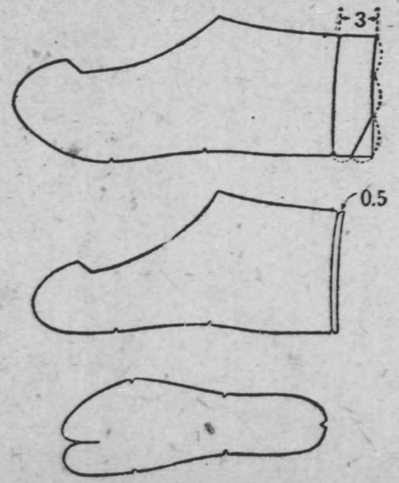
（ヲ）外甲の踵・足くび廻り・甲上部は內甲の寸法に合はせます。

（ワ）甲の上部の線は實測した箇所で寸法に合はせて引きます。」

三　型紙の取り方

こはぜを附ける場合は圖のやうに、外甲に三センチ（八分）內甲に〇・五センチ（一分）ぐらゐの重なりをつけ、なほそれ〳〵に合ひ標を入れておきます。

◇　市販の型紙と比較してどこが違ふかしらべてごらんなさい。但し市販の型紙は大抵縫ひ代が含まれてゐます。

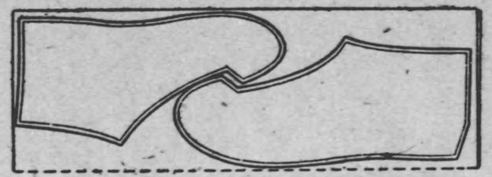


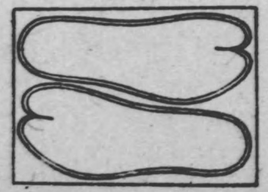
◇　原型を應用して、布の靴下や爪先の割れない足袋などを工夫してごらんなさい。

◇　足くびをゴム又は紐にする時の型紙の直し方を考へてごらんなさい。

四　裁ち方

縫ひ代、〇・五センチ（一分）ぐらゐを加へ、布目に注意して裁ちます。



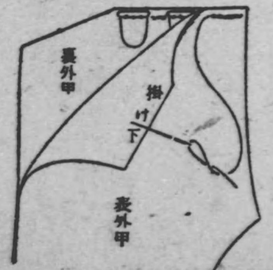


◇　一足分の布數は幾枚ですか。又、裁ち落し布は何に利用しますか。

五　縫ひ方

縫ひ絲は丈夫な物を用ひ、こはぜ掛けの絲は、縫ひ絲を幾本かより合はせて用ひます。

（イ）こはぜの附け方　裏外甲のこはぜ附けの方を一センチ（三分）折り返し、その表側にこはぜを並べ、假縫ぢをして、その上に



表布を重ねて返し縫ひにします。

◇　裏布を折り返すのはなぜでせう。

（ロ）　足くび廻り及び掛け下縫ひ　圖のやうに縫ひ、こはぜ掛けの所は表の長い分を折り込み、見返りになるやうに作ります。

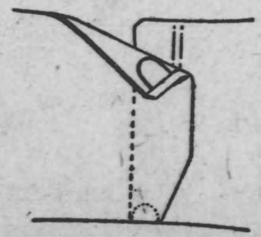
（ハ）　内甲縫合はせ、掛け絲の位置に力布を附け、足くび廻り及び掛け絲附けの方を、表裏縫ひ合はせます。

（ニ）　甲の縫合はせ、外甲で内甲を挟み、布を十分伸して縫ひます。

（ホ）　掛け絲附け

（ヘ）　踵止め

（ト）　底附け　先づ合ひ標を合はせて布の落ち着きをしらべ、要所を留めておきます。爪先は甲布に皺の出ないやうに落ち着け、踵の方は張り加減にして、



三、四針ごとに、絲を掛けてかゞりながら縫ひます。

（チ）　返し方　底附けの縫ひ目を叩いて柔かくし、踵め踵や爪先を返しておいてから、全部を返し、縫ひ目を整へ、形を正します。

着用・手入れ

穿き心地をしらべ、自分に合ふやうに補正します。なほ、要項を記しておいて、次の參考にします。

又、足袋は傷みやすいものですが、これをよく手入れしたのは快いもので、その人柄さへ窺はれるものですから、自分の物、家族の物など注意して手入れをしませう。

◇　どこが一番傷みやすいでせう。傷み方と、補強や補綴に就いて考へてごらんなさい。

足袋の文數と寸法

市販の足袋の大きさは文數によつて表してあります。これは古錢（穴のあいた一厘）一箇の直徑を一文とし、十文の足袋は古錢十箇を並べた長さをいひます。又、この一文の直徑は曲尺で八分あります。

◇　九文半の足袋の長さは幾センチありますか。

〔增〕　手　袋（編み物）

材料・用具

絲　中細一くり（二オンス）

棒針　零號か一號　四本一組

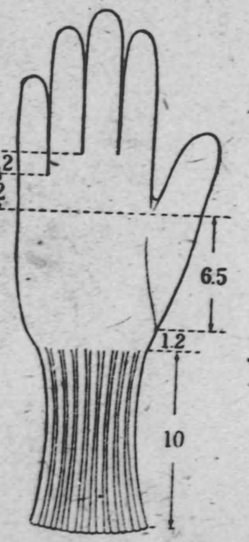
寸法

男子用

腕の部	一〇センチ（二寸六分）
おや指丈	五・八センチ（一寸五分）
人指し指丈	七・五センチ（二寸）
中指丈	八・五センチ（二寸二分）
無名指丈	七・五センチ（二寸）
小指丈	五・八センチ（一寸五分）
おや指脇まで	七センチ（一寸八分）
おや指脇から小指まで	二センチ（五分）

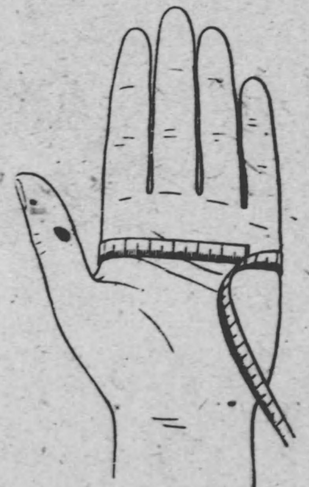
女子用

同上	
五・二センチ	（一寸四分）
七センチ	（一寸八分）
八センチ	（二寸一分）
七センチ	（一寸八分）
五・二センチ	（一寸四分）
六・五センチ	（一寸七分）
同上	



目數のきめ方

圖のやうに掌圍の寸法を測り、この寸法に合ふ目數を知り、これより四目少い目數を基本目數とし、この基本目數から各指の目數を算出します。おや指の目數は全部增し目で作り、おや指と人指し指、小指と無名指との脇で各〻四目、人指し指と中指、無名指と中指との脇で各〻二目、中指の兩脇で各〻二—四目增します。又、各指の目數は、人指し指・中指・無名指は同數に、おや指・小指はそれより四目づつ增減します。卽ち、基本目數に各指脇の增し目の合計（十六目ぐらゐ）を加へ、更に小指が他の指より少い分（四目）を加へて三本の指の目數を割り出します。



例

基本目數　六十八目（女子用）

（65+16+4）÷4＝21……人指し指・中指・無名指

22—4＝18……小指

22+4＝26……おや指

基本目數七十二目（男子用）の場合のやうに、二本の指の目數が奇數になる時は、中指の兩脇で四目づつ增すやうにします。

編み方

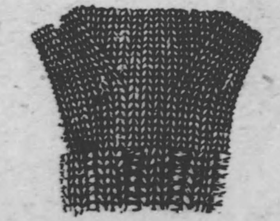
一　手くび

先づ表編みにて三段編み、四段目は「一つ掛ける」「二目一度」で編

みます。五段目から三段を表編みとし、始めの三段を折り返して、最初の目をすくひながら一しよに編みます。次の段からは、ゴム編みにして十センチ（二寸六分）ぐらゐを編み、こゝより表編みとして、一センチ（三分）ぐらゐを編みます。

二　おや指の附け根まで

四目を中心としてその兩側で一段おきに增し目をし、おや指の目數だけ增して、こゝから二センチ（五分）ぐらゐをそのまゝ編みます。

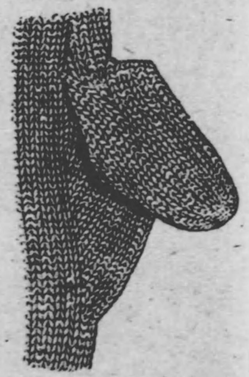


三　おや指

おや指の目數を四本の棒に取り、その他は絲に通しておきます。次におや指の跨の所で四目作り、そのまゝ二段編み、三段目では跨の位置六目の間で「かぶせ目」「表二目」「二目一度」をして二目減じ、次はそのまゝ一段編み、次の段で先に減じた所で「かぶせ目」「二目一度」をして二目減じ、おや指の目數にします。さうしておや指丈の〇・七センチ（二分）手前まで編み、指先は一段おきに一廻りで五目づつを減じ、十二、三の目數になつたら、編み終りの絲十五センチ（四寸）ぐらゐ殘して切り、目を通してしめ、裏に返し、四センチ（一寸）ほど目をすくつて止めます。

四　おや指跨から小指跨まで

おや指跨で作つた四目から八目をすくつてそのまゝ二段編み、三段目八目の所で「かぶせ目」「表四目」「二目一度」をして二目減じ、次の一段はそのまゝ編みます。次の段では先に減じた所で「かぶせ目」「表二目」「二目一度」をして二目減じ、そのまゝ小指の跨まで二センチ（五分）ぐらゐ編みます。



五　小指

小指の目數を四本棒に取り、編み方はおや指の要領でします。

六　小指跨から無名指まで

小指跨はおや指跨のやうにし、無名指まで一・二センチ（三分）編みます。

七　無名指

指の目數より二目少くとり、小指の跨の所で二目作り、そのまゝ丈の〇・五センチ（一分）手前まで編み、指先を作ります。

八　人指し指

無名指のやうに編みます。

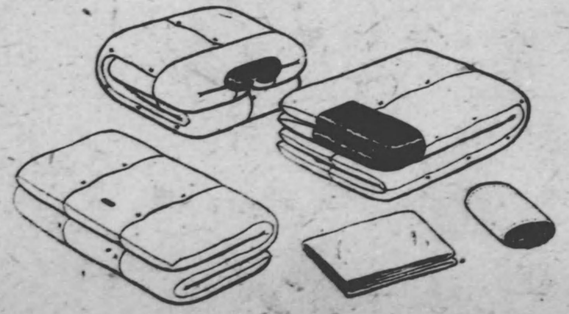
九　中　指

中指の兩跨で六目づつすくひ、この間で一段おきに四目を減じ、中指の目數として編みます。

五寝具類

寝具は、睡眠による休息を助け、新しい活動力を養ふ上に最も大切なものであり、随つて、その適否は私どもの生活に影響が少くありません。

蒲團の量は季節により、年齢により、又用ひる人の健康狀態によつて異なりますから、薄めの物を用ひて調節するやうにするのが便利ですし、又、保温效果も大きいものです。掛蒲團を厚くするよりも、敷蒲團を厚くする方が有效ですが、あまり厚過ぎるのもよくありません。概して老人や幼兒には輕く温かにします。



◇　古來健康法といはれてゐる「頭寒足熱」とはどういふことですか。

◇　枕の高さ・大きさ・固さなどの適否を考へなさい。

材料

蒲團には綿・羽毛・藁・枯れ芝などを用ひます。中でも綿は柔軟で、保温的で、吸濕性もあり、弾力性にも富んでをります。藁・枯れ芝なども工夫すれば、綿に劣らない效果を擧げることができます。

◇　寝具の布地には、どんな物が適當でせうか。

◇　藁蒲團の特徴と用途を考へなさい。

寸法

（イ）敷蒲團

丈　一七〇―一九〇センチ（四尺五寸から五尺）。

幅　八〇―九五センチ（二尺一寸から二尺五寸）。

（ロ）掛蒲團

丈　敷蒲團と同じ。

幅　一五二―一六〇センチ（四尺から四尺二寸）。

（ハ）夜着

丈　掛蒲團と同じ。

衿肩あき　一一センチ（三寸九分）ぐらゐ。

衿幅　一〇センチ（二寸六分）ぐらゐ。

肩當て　並幅にして丈は後幅と袖幅とこの二倍。

まち　一五センチ（四寸）四角。

袖口ふき　八センチ（二寸一分）ぐらゐ。」

裾ふき　三〇センチ（八寸）ぐらゐ。

衿ふき　一五センチ（四寸）ぐらゐ。

その他は大裁ち長着と同樣にします。

（ニ）實測による場合　丈は身長より二〇センチ（五寸三分）ぐらゐ長く、幅は、敷蒲團は肩の幅より五〇センチ（一尺三寸二分）ぐらゐ、掛蒲團は更に五〇センチ（一尺三寸二分）廣くします。

◇　實測による寸法と普通寸法とを比較して、各〻の長所を考へてごらんなさい。

◇長着を更生して夜着の表に用ひる場合、裏にどれだけの布が必要ですか。

◇丈百九十センチ（五尺）の敷蒲團一布分の綿は凡そ五枚を要します。一組を作るには、どれくらゐの綿がいりますか。」

手入れ

一　日常の手入れ

使用の時は埃を立てないやうに敷き伸し、起床後は先づ窓や戸障子をあけ放して、蒲團に籠る體氣やぬくみを去り、輕く埃を拂ひながら一つ〳〵積み重ねます。又、空氣の乾燥した日には日光に當て、傷んだ箇所は繕ひ、掛衿・敷布・枕覆ひなど、洗濯のできる物は手まめに洗濯して、保健の目的にかなふやう心掛けます。」

◇寢具を日光に當てるのはどんな目的からですか。」

◇寢具を干す時は、どんな注意がいりますか。」

◇病人の寢具に就いて、特に考慮する點を擧げなさい。

二　季節による手入れ

季節によつて不要となつた寢具は、しみ・汚れを取り、よく日光に當てて正しく疊み、材料によつては防虫劑を入れて、布又は紙に包み、濕氣の少い押入れ・長持などにしまひます。洗濯の必要ある物は、なるべく夏の間に手入れをしておくのが望ましいことです。」

◇どんな方法で洗濯しますか。

◇寢具の納め方はどのやうにしますか。

睡眠と習慣

睡眠は何も有效な休養法で、安眠は保健上の要件です。睡眠中は生理機能も減退して、體温も幾分降りますから、寢冷えに注意し、又、非常の場合なども考へて、適當な寢まきを着用するやうにします。」

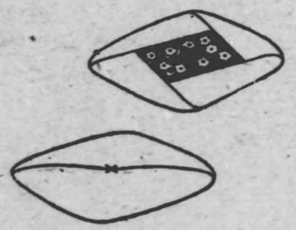
◇睡眠時間は何時間ぐらゐが適當でせう。又よく眠るには、どんな注意が必要ですか。

◇寢まきは、どんなのがよいでせう。

◇寢行儀に就いて注意されたことがありますか。」

〔增〕座蒲團

形



材料

殘り布を利用します。」

仕立て方

一　寸法

普通は次の寸法で仕立てます。

丈　五五センチ（一尺四寸五分）。」

幅　五〇センチ（一尺三寸二分）。」

◇座蒲團の大きさは何によつてきめたらよいでせう。」

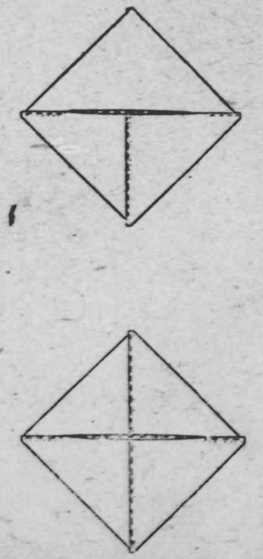
二　裁ち方

◇幅三十六センチ（九寸五分）の布で裁つ場合は、用布は何ほどいりますか。

三、縫ひ方

返し口は丈夫な所であけるやうにします。

並幅の場合　　廣幅の場合



◇　鏡仕立ては、どのやうにしますか。

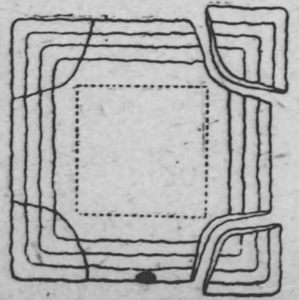
（イ）綿の入れ方　表になる側を上にして正しく置き、綿を伸さないやうにして手で切ります。

綿のつぎ目は三センチ（八分）ぐらゐ重ね、二枚目からは端を四センチ（一寸）ぐらゐづつ控へて、中央へ重ねて行きます。」

◇　綿を鋏で切らないのはなぜでせう。

◇　古綿を使用する時は、どのやうにしますか。

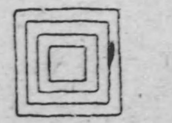
次に四隅の綿を切り取り、手のひらで綿の厚みをしらべながら、中央へ適當に置き換へ



ます。

◇　これと別な綿の入れ方も工夫してごらんなさい。

次に側と同じ大きさに折り、角の所は二度に重ね合はせて整へます。なほ、掛け綿を入れますが、中央を高くするには、團のやうに綿を重ねて入れます。



（ロ）返し方　側・綿共に四隅を綿の方に折り曲げ、側をかぶせるやうにして引き返します。

四隅によく綿を含ませ、返し口をくけ合はせて綿を平にします。

◇　掛蒲團のやうな大きいものは、どう取り扱ひますか。

（ハ）綴ぢ方　綴ぢ絲二本で、中央へ三センチ（八分）の針目で十字に掛け、表になる方で結びます。」

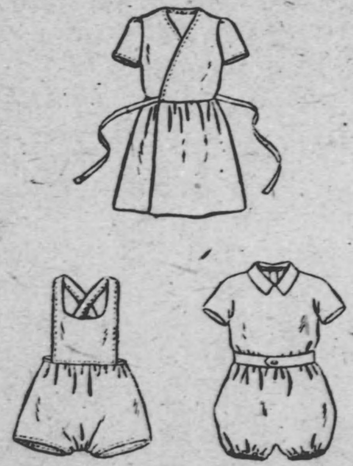
◇　綴ぢ絲の長さは幾らあればよいでせう。又、敷蒲團一枚を綴ぢるのに、凡そどれくらゐの絲がいりますか。

（ニ）仕上げ　綿屑を拂つて、よく日光に當てます。

六　乳幼兒用被服

乳幼兒の身體は生理機能がまだ十分に發達してゐませんから、その被服の形に就いても、材料に就いても特別の注意がいります。

遊び着



◇　これらの形の特徴を考へてごらんなさい。

幼兒期になれば運動も激しく、發育も盛んです。隨つて、運動を妨げないやうに、又、布の壽命に應じ大きく仕立てます。できるだけ覆ふ部分を少くして、皮膚を丈夫に育てるやうにも注意します。

材料

◇　材料を選ぶには、どんな注意がいりますか。

◇　別布をはぎ合はせて用ひる時は、どんな注意をしますか。

仕立て方

一　寸法

身長

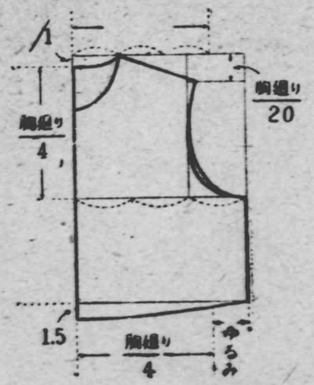
着丈　膝裏まで。

袖丈

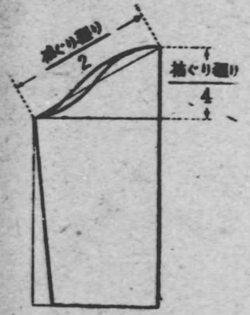
胸廻り

二　原型

(一)　胴



(二)　袖

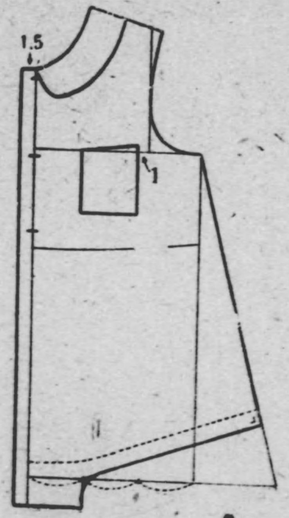


◇　冬物を作る場合は、原型をどのやうに直したらよいでせう。

三　型紙の取り方

（一）身ごろ

（二）袖



袖は袖山に縫ひ縮めをするために、圖のやうに原型を直して型紙を取ります。

（三）衿

◇　肩先の重ね方の多少によつて、出來上つた衿はどう違ひますか。

四　裁ち方

◇　裁つ時、地質によつてはどんな注意がいりますか。

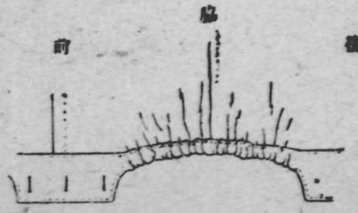
五　縫ひ方

（イ）前あきの始末　適當に前あきを殘し、下の方は左右を縫ひ合はせます。前あきは見返しを附けて、あき止まりを固く縫つておきます。

（ロ）かくし附け

（ハ）脇縫ひ

（ニ）裾の始末　紐の通るやうに見返しを附け、ゴム紐の代りに丈夫な布の耳などを裂いて用ひ、兩端を留めておきます。



◇　紐の長さは、どうしてきめますか。

（ホ）肩の縫合はせ

（ヘ）衿及び衿附け

◇　衿附けの時、縫ひ代がつれると、どんなになりますか。

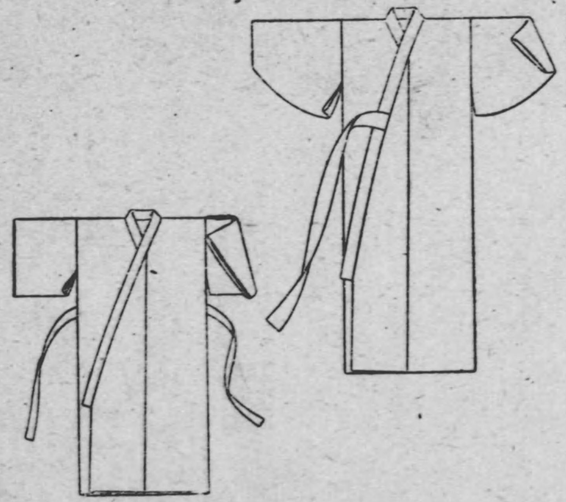
（ト）袖及び袖附け

（チ）穴かゞり・ボタン附け
（リ）仕上げ

〔増〕小裁ち長着

小裁ちには、一つ身裁ち、三つ身裁ちなどがあり、生後から學齢に達する頃まで着用します。多くは衽を半幅にした一つ身裁ちを用ひます。肩揚げ・腰揚げによつて大きさを加減することは中裁ちと同じですが、乳兒には揚げなしにして脚をくるみます。

形



袖は乳兒の頃は普通ひろ袖とし、歩くやうになれば筒袖・元祿袖・舟底袖などにしますが、あまり大きくすると運動を妨げ、布も不經濟です。

又、紐は寝かせておく頃の物は後に附け、歩くやうになれば幅を廣くして後で結び、帶の役目もするやうにします。」

◇　紐を後に附け、ひろ袖とするのはなぜでせう。」

材料

仕立て方

一　寸法（二つ身裁ち）

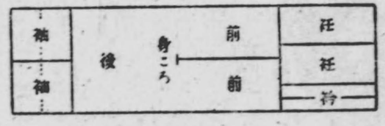
後は並幅一ばいにしますが、着る子供の年齢と布の都合とによつて多少各部の寸法を加減します。

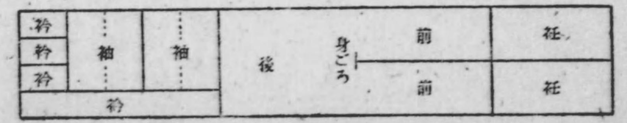
身丈　七〇―九〇センチ（一尺八寸五分から二尺四寸）。
袖丈　二〇―二五センチ（五寸三分から六寸五分）。
袖幅　一七―二三センチ（四寸五分から六寸）。
袖口　一三―一五センチ（三寸五分から四寸）。
袖附け　一五センチ（四寸）ぐらゐ。
後幅　一ばい。
前幅　一ばい。
衽幅　一〇―一四センチ（二寸六分から三寸七分）。
衽下り　九センチ（二寸四分）。
身八つ口　一〇センチ（二寸六分）。
衿肩あき　四センチ（一寸）ぐらゐ。
衿幅　二・五―三・五センチ（七分から九分）。
衿下　二〇センチ（五寸三分）ぐらゐ。
紐丈　七〇―八〇センチ（一尺八寸五分から二尺一寸）。
紐幅　並幅四つ割り、又は半幅。

◇　紐附けの位置のきめ方はどうしますか。又、紐丈はどうしてき

めますか。」

二　裁ち方





◇　胸廻りを實測して、型紙によつて裁つ方法と比較してごらんなさい。

◇　五、六歳では表の總用布はどれだけを要しますか。

◇　以上二種の裁ち方から裏用布を積つてごらんなさい。

三　標附け

袖は中裁ちに準じます。合ひづま幅は衽幅より〇・五センチ（一分）ぐらゐ減じます。

◇　衽幅が狹い場合は、衿附けをどのやうにしますか。

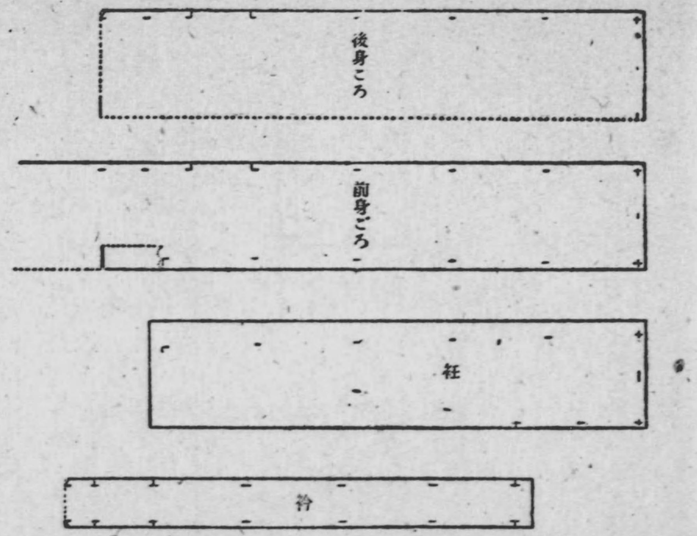
◇　單・袷・綿入れの標附けは、どう違ひますか。

四　縫ひ方

單は衽附けを袋縫ひにするほか、大體中裁ちに準じ、袷・綿入れは表裏の釣合にも注意するなど、總べて既習の方法によりますが、乳幼兒の被服はまる洗ひの場合を考へて仕立てることが大切です。

五　仕上げ

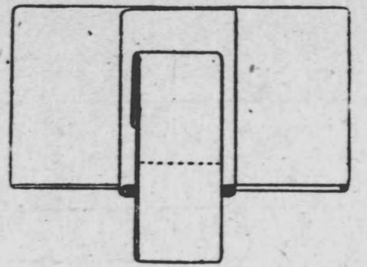
着用・手入れ

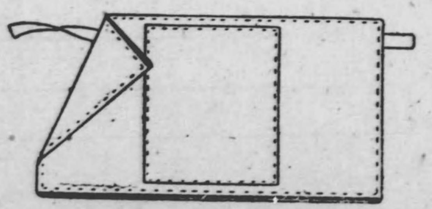


乳兒の被服は特に衞生を第一とし、始終洗濯して清潔を保つことはもちろん、氣候の變化による加減が大切です。隨つて、その被服の種類と數量はこれらのことを考へて整へ、手入れを怠らないやうにします。

參考

乳幼兒用被服の種類及び數量					
肌じゆばん	三	袖なし羽織	一	むつき覆ひ	二
中着	三	よだれ掛	四	足袋	二
胴着	二・腹掛		二	寢具一揃ひ	一
長着	二	むつき一組	二〇	子守りばんてん	一





大　並幅六五センチ（一尺七寸二分）。

小　半幅六〇センチ（一尺五寸八分）。

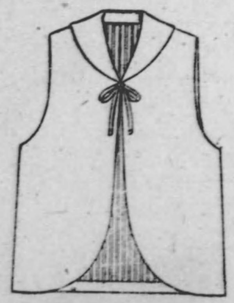
むつきは吸濕性に富む材料を用ひて輪に縫ひ、大二枚、小一枚を重ねて一組とします。

むつき覆ひは防濕性のある布を重ねて綴ぢ合はせ、中央に防水布か油紙を綴ぢ附け、表上部には長着と同樣に紐を附けておきます。なほ成長につれて三角型のものを用ひて、できるだけ覆ふ部分を少くします。

〔增〕小裁ち袖なし羽織

袖なし羽織は手輕に脫ぎ着も簡單ですから、乳幼兒の防寒用に適します。

形



材料

地質は適宜小ぎれを利用しますが、色や柄は、なるべく幼兒にふさはしい明かるいものを選ぶやうにします。

◇　乳幼兒の色に對する感覺に就いて注意したことがありますか。

仕立て方

一　寸法

小裁ち長着と同様、後は並幅一ばいとします。幅が狭い時は、まちを入れて補ひます。

身丈　四五―五五センチ（一尺二寸から一尺四寸五分）。

身幅　一ばい。

まち幅　上は四センチ（一寸）下は六センチ（一寸五分）。

衿肩あき　四センチ（一寸）。

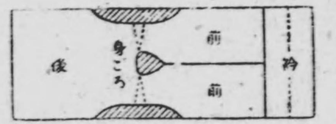
肩下り　二センチ（五分）。

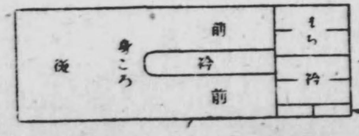
脇あけ　二〇―二三センチ（五寸三分から六寸）。

一　紐の位置　肩から二〇センチ（五寸三分）ぐらゐ。

二　裁ち方

◇　裏用布はどう積りますか。





◇　幅七十六センチ（二尺）の風呂敷一枚を用ひて、袖なし羽織の表を裁つには、どのやうにしますか。又、裏用布はどれだけいりますか。

三　標附け

表裏を重ねて胴はぎの標をし、肩下り・まち・紐の位置、衿など、必要に應じて標附けをします。

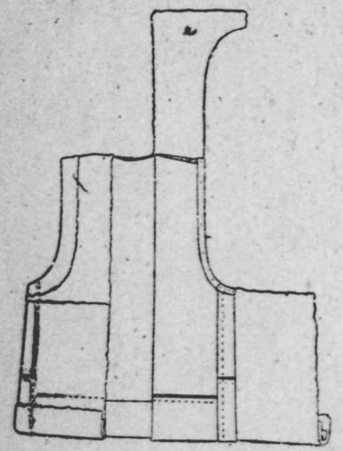
四　縫ひ方

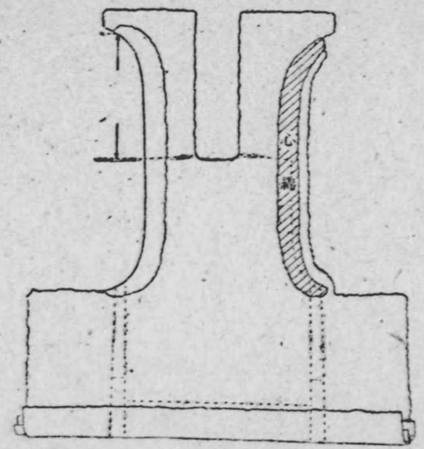
（イ）胴はぎ

（ロ）脇縫ひ又はまち附け

（ハ）前裾及び脇あけ　前裾を圓くする場合は、圓みの部分を元縫袖のやうに縫ひ、又、前裾・脇あけ共に裏を控へるやうにします。

（ニ）綿入れ　脇あけが眞直ならば、心綿も眞直にしますが、脇をくつた場合は、その形に合はせて圓のやうに入れます。





又、前裾を圓くした場合も同樣に、始めに綿をその形に整へておきます。なほ、背の所は綿を厚めに入れます。

◇　背梅綿を二重に入れる時は、どのやうにしますか。

（ホ）假綴ぢ　裾・脇あけに、よく綿を含めて假綴ぢをします。

（ヘ）紐及び紐附け　心を入れる場合は、適當な幅に縫つて返し、眞綿又は毛絲などを通します。紐先を作り、力布を當てて裏身ごろへ縫ひ附けます。

（ト）衿下の始末　前身ごろの端へ出た綿を平にし、表に含めて縫ひ代を折り、綿だけをすくつて綴ぢ附け、裏は〇・四センチ（一分）控へてくけ合はせます。

（チ）衿及び衿附け　衿は薄い心を入れて裏を控へめに作り、中央を裏身ごろの背に合はせて縫ひ附けます。次に、綿を縫ひ代に綴ぢて表身ごろをくけ附けます。

◇　裾まで附く衿の折り方はどうしますか。

（リ）縫綴ぢ　脇、又はまちの縫綴ぢをし、脇あけは縫ひ目の所で絲の見えないやうに綿をすくつて綴ぢます。

（ヌ）肩揚げ　肩揚げは全體の形を見て位置・分量を定め、恰好よく摘まみます。

（ル）仕上げ　背紋の位置に背まもりをすることもあります。

着用・手入れ

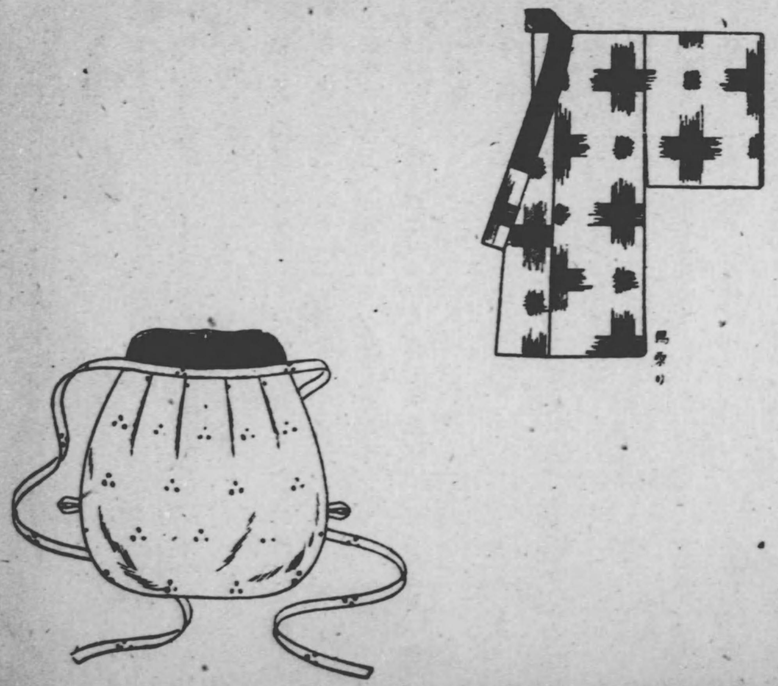
◇　お互の材料で、小裁ち長着と袖なし羽織との調和を見てごらんなさい。

〔增〕　子守りばんてん

子守りばんてんは乳幼兒を背負つた時、保温の役目をすると共に、外傷を防ぐ上にも役立ちます。普通は綿入れ仕立てにしますが、袷仕立てにすることもあります。

形

形は、はんてんの形式による物が、多く用ひられてをりますが、背負ふ者の動作が身輕にできるやうにするには、卷き蒲團式の物も重寶です。



材料

◇ 掛衿には、どんなものがよいでせう。

仕立て方

一 參考寸法

身 丈 羽織と同寸、又はやゝ長めにします。
繰越し 四センチ（一寸）。
袖 丈 四五―五三センチ（一尺二寸から一尺四寸）。
袖 幅 三二センチ（八寸五分）。
袖附け 二七―三五センチ（七寸から九寸二分）。
袖口ふき 綿入れは一センチ（三分）裕は〇・五センチ（一分）ぐらゐ。
後 幅 三二センチ（八寸五分）。
前 幅 一ばい 衽附けの場合は二七センチ（七寸）ぐらゐ。
身八つ口 一三センチ（三寸五分）。
衿肩あき 一一センチ（二寸九分）。
馬乘り 一九センチ（五寸）。
衽下り 一九センチ（五寸）。
衽 幅 一五・五センチ（四寸一分）。
合ひづま幅 一五センチ（四寸）。
衿 下 三〇センチ（八寸）。
衿 幅 七センチ（一寸八分）。

◇ 袖附けの多少は、着用上どんな影響がありますか。

◇ 馬乘りをあけるのは、なぜでせう。

二 裁ち方

表は、はんてん及び大裁ち長着を應用します。裏用布は、衿及び袖口のほかは、表と同様にしますが、總用布は、表の折り返りの寸法によつて異なります。」

三 標附け

袖は丹前と同樣にします。

四 縫ひ方

裾はぎの後、綿入れは表・裏を別々に縫ひ、背には綿を多めに入れ

て丹前の要領で仕上げます。袷はできるだけ四つ縫ひにします。

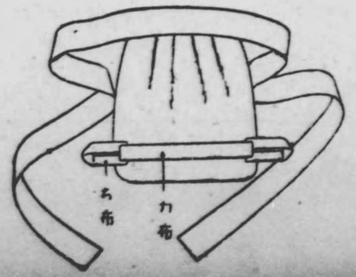
◇ 袖附け・身八つ口・馬乘りのほころびを防ぐにはどうしますか。

着用・手入れ

◇ 背負ひ帶は、どんなのがよいでせう。

參考

紐丈　三八〇センチ（一丈）。
紐幅　七センチ（一寸八分）。
胴布　並幅にて丈・幅同寸。



七　禮　服

禮服の形式は、わが國の歷史と共に變遷して今日に及びました。遠くは唐制を受け入れた時代のもの、降つて平安時代の典雅な禮裝、戰國勃忙の世相を反映した武家の禮裝、安土・桃山期から江戸期にかけての豪華な服飾など、いづれもその時代の國民生活のすがたを反映してゐます。

今日行なはれてゐる服制は、明治の初めに定められたもので、その後多少の改廢はありましたが、公式の場合はそれによつて明らかに制定されてをります。しかし、一般にはおのづからゆるやかなところもあつて土地の慣習なども參酌され、殊に最近は、著しい簡素化が行なはれてをります。

男子の禮服は、これまで一般に、羽織・袴・フロックコート・モーニングコートなどが用ひられてをりましたが、國民服令が公布されてからは、國民服に儀禮章を附けてこれに代へる場合が多くなりました。

男子の和服禮裝には、羽織・長着共に無地五つ紋を正式とします。民間で衣服に紋章を置くことは鎌倉時代からのやうで、始めは標識として用ひられたものが、やがては家柄を表すやうになり、家紋を尊重する精神となつて現れました。

女子の禮服は、白衿紋附きを多く用ひます。長着は無地の五つ紋とし、慶事には模樣物を、喪には無地物を用ひ、普通は二枚重ねとします。丸帶を着けるのが正式で、羽織を着るのは略式とされてゐます。しかし、婦人標準服が制定せられてからは、現在の生活に適した新しい樣式が考案されようとしてゐます。

女子の和服禮裝は小袖と帶とから構成されてをります。小袖は、もと、肉衣として下に着た物で、白無地で作られ、袖の形も筒形で

したが、室町時代から漸次外に着るやうになり、袖の形も圓みを帶び、地質・色あひなども美しいものが用ひられるやうになりました。これと共に漸く帶が注意をひくやうになり、安土・桃山期から江戸期にかけては小袖・帶の全盛期で、形・材料・着方などの上に著しい發展を見ました。これらの中には、今日の生活に容れられないものもありますが、短袖にふさはしい帶の調和など、古人の見識に學ぶところが少くありません。

七五三に着せる子供の晴れ着なども、從來外觀を重んずる餘り、特殊の物さへ作られましたが、最近次第に實用化してゐます。

このやうな形式の簡素化は、素朴純粹なわが國の傳統を發揮しようとするもので、禮を重んずる敬虔な氣持は、おのづからその簡素なすがたの中にあるのです。私どもは、生活上のたしなみとしても、この簡素にして敬虔なすがたを、被服の上にも現したいものです。

禮服は禮の精神を服裝の上に現すものでありますから、從來のやうに慶事には明かるい物を、喪にはぢみな物を選ぶことが自然でありますが、その本來の精神を忘れて、形・地質・色・柄など從來の物にのみ捉はれることのないやうに注意し、特に身だしなみをよくし、下着類も清潔なものを用ひるやうにします。なほ、禮服は折り目なども正しくし、附屬品もよく整へ、手入れの届いたものを用ひるやうにします。

◇禮服の納め方に就いてどんな注意がいりますか。

むすび

被服は、生活上の要件に基づいて變遷、發達したものですから、被服を通して時代の思潮、生活の樣相などを窺ふことができます。私どもは國民としての自覺をもつて、傳統の美を生かし、創意を加へて、品位ある衣生活の工夫をしなければなりません。

昭和二十一年三月 七日印刷
昭和二十一年三月十一日發行

（略名）被服四

被服

定價參圓八拾錢

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE Mar. 7, 1946)

著作權所有

著作兼發行者 東京都神田區岩本町三番地 中等學校教科書株式會社 代表者 龜井寅雄

印刷者 東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社 代表者 佐久間長吉郎

配給元 東京都神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給統制株式會社

發行所 東京都神田區岩本町三番地 中等學校教科書株式會社

日本出版會會員番號一〇〇一〇六